
太陽系の外側

壇 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽系の外側

【Nコード】

N5368N

【作者名】

壇 敬

【あらすじ】

今だに到達していない「太陽系の外側」へ。有人宇宙船「ランナウェイズ」の探査の旅を人類の発展と探査の歴史を加味しながら綴ります。銀河の潮流は人類にどんな影響があるのか、そして人類は銀河に漕ぎ出せるのか。

【空想科学祭2010参加作品】

復路途中（前書き）

初めまして。

「壇 敬（ダンケイ）」といいます。

遂に「空想科学祭」にデビューしました。
どうか、お手柔らかに……。

【空想科学祭2010参加作品】

復路途中

「大丈夫か？」

「今のところはな」

オペレーターームの座席にぐったりと身体をあずけた二人のクルー、シマとモリはお互いを見てうなずき合った。

オペレーターームの分析チームのシートに座っている、モリはかろうじて稼働している分析記録コンピュータを操作した。

オペレーターームにいるもう一人、シマは操船席に座り、航法コンピュータを動かしていた。

「全くひどい有様だな、この『ランナウェイズ』は」

「ああ、全くだ。これ程の状況になるなんて……」

二人のクルーは溜息をつきながら、更に深く座席に身体を埋めた。

『ランナウェイズ』とは二人の乗っている宇宙船の船名で、太陽系の外側へ、ヘリオスフィアの領域から飛び出した、人類初の深宇宙有人探査船であった。

『ランナウェイズ』のオペレーターームには数人が操作する座席があつたが、もう二人の他は誰も座っていないかった。

「もう、俺たち二人だけか」とモリがたずねた。

「動けるのはな」とシマが返答をした。

『ランナウェイズ』のクルーの総人数は十八名だったが、シマとモリの二人以外は動けない状況に陥っていた。クルーの半数は既に死亡し、二人を除く残りの者はメディカルカプセルに入って治療を受けていた。だが、メディカルカプセルで施される施術は限られており、遅かれ早かれやってくる死を待つのみ状態だった。

「現在位置は太陽から百九十五AUの位置だ」とシマ。

「『思えば遠くへ来たものだ』ってか……歌を歌う気にもならないな」とモリ。

その時、船体が大きく揺れた。

「また『反物質』か？」とシマが訊いた。

「ああ、そうだ」とモリが返答した。

船体に半物質素粒子が衝突して対消滅が起こり、船体表面で爆発が起こるためだ。素粒子レベルでの対消滅なのだが、それ相当の衝撃がある。百二十五メートルもある『ランナウェイズ』の船体でも、かなりのショックとして感じられるのであった。

「船体はかなりやられたな」

「反物質だけじゃなくて、放射線にもな」

「防御シールドもボロボロだったな」

「太陽系内への帰還は無理か？」

「いや、もう既に”帰還シーケンス”には入っているぞ」

「そうか」

「ただ、生きて帰れるかは疑問だ」

「……」

時折、船内の一部、操作パネルや壁面が光り輝いた。

「この光が曲者だよな」

「高エネルギーの放射線か」

「間違いなく、身体を蝕んでいる」

「要するに『被曝』だから」

シマとモリの二人には、既に放射線障害の症状があり、吐き気や頭痛が絶え間なかった。

シマが、ポツリとつぶやいた。

「我々はあまりにも知らなすぎた……」

そして、モリがそれに呼応するようにつぶやいた。

「ああ、その通りだ。宇宙のことをな」

『ランナウェイズ』は少し明るく輝いている深宇宙から、太陽を目指して復路を進んでいた。

人類の発展

人類は二十五世紀を数えていた。二十五世紀の人類の勢力範囲は、木星まで辿り着いていた。

木星の軌道上には、千人以上が暮らす数キロメートルの大きさの国際宇宙ステーションベース（ISSB）が建設され、木星の大気を採掘するに至っていた。木星の大気はエネルギー源として利用していた。だが、それは核融合や燃焼の原料としてではなく、エネルギーの素そのものとしての利用である。そのエネルギーの素は『プラズマバーストシステム』という機構を利用することで、飛躍的なエネルギー効率をもたらしたのだった。

西暦二三六四年に、プラズマの物質励起効果による物質分解を応用して、物質そのものを電気エネルギーに変換する機構が発明された。それを契機にさまざまなエネルギーへと変換することに、この機構が利用されるようになった。この機構を『プラズマバーストシステム』と呼んだ。

理論上は、物質質量の六十四パーセント以上をエネルギーに変換できるのだが、高効率な触媒が見つかっていないことと、完全密閉化を実現する装置が未だに開発出来ていないため、その変換効率は三十二パーセントに止まっていた。それでも今までの人類の動力機関から考えると、夢のようなエネルギー効率であった。

この「プラズマバーストシステム」を運動エネルギーへと変換することで、宇宙船の推進に応用された。それが「プラズマバーストエンジン」と呼ばれている推進装置で、今までのイオンエンジンに比べると効率が良いのはもちろんだが、推進力、持続力でも性能をはるかに凌いでいた。このプラズマバーストエンジンを基にして、人類は太陽系の各惑星に進出した。

宇宙空間の加速は今までのエンジンとは格段に違っていた。正噴射による加速制御と逆噴射による制動技術が考案され、その恩恵は

ホーマン軌道を無視した軌道計算を可能としたのだった。それは、航行時間を一気に半分以下にしてしまったことに表されている。

地球から月への往復はたったの五十時間となり、火星を越えたメイ・アステロイドベルトの任意の小惑星にでも、たった半年で辿り着くことが出来るようになった。

宇宙開発も飛躍的に進歩を遂げて、月は太陽系宇宙への玄関口となり、プラズマバーストエンジンを搭載した宇宙船の発着港として栄えている。

また、火星と金星はテラフォーミングを開始して一昨年に百年を迎えた。火星は七十年で居住可能になったが、金星はまだまだその途上であり、もう五十年程の時間が掛かるだろうといわれている。そして、メイ・アステロイドベルトの小惑星からの資源を素に地球周辺のラグランジュポイントにスペース・コロニーも建設が始まっていた。

更に人類は、木星のISSBを拠点に、外惑星の開発にも着手しようとしていた。天王星、海王星の探査には余念が無く、数十年後にはISSBも建設されるプロジェクトが進行中であった。

そんな人類の発展に、一つだけ影を落としているものがあつた。それが『太陽系の外側』だったのだ。

探査史

二十五世紀の人類が関心を示しているのは『深宇宙』だった。

『深宇宙』といっても、何億光年も彼方の遠い銀河の話ではない。二十五世紀の人類が『深宇宙』といえば、太陽系の外側、ヘリオスフィアを飛び出すことであつた。

まだまだ太陽系内を開拓し尽くした訳ではない。カイパーベルトやオールトの雲は、ここ数年探査が始まったばかりである。しかし、今や人類全体の関心事は『深宇宙』なのであつた。

どうして、そんなに『深宇宙』に関心が集まるのか？ それにはそれ相当の理由があつたのだ。

過去においては、パイオニアに始まり、ボイジャー、ニューホライズンズ、ファラウェイズ、エッジワース、セドナパスファインダー、オールトマスターなどの数多くの無人探査機が太陽系の惑星を探査した後に、太陽系の外側へと船出していった。ボイジャーの、太陽からの距離が九十AUの位置で末端衝撃波面を通過してヘリオシースに到達、ヘリオポーズが深宇宙の磁場の影響で歪んでいる報告が最初の太陽系外縁部の情報だった。

しかしそれ以降、火星以遠に向かう探査機の多くは原子力電池を搭載していたのだが、依然として太陽系の外側についての情報はつかめていなかった。原子力電池を三基積んだニューホライズンズ、その後のフラウエイズからは大型探査機となり、マイクロ原子炉を積んで月の軌道から発進したのだが、ヘリオシースの領域に至ると消息を絶ってしまうのだった。

何しろ百AUも離れた距離から探査機が送り出す電波は非常に弱々しく、地球上だけで識別するのは事実上不可能と判断されて、地球と月でのVLAシステムで探査機からの電波を受け取ることも試みられた。

近年においては、木星のISS（当時は基地と呼べる程ではなか

った)から深宇宙探査に送り出されたオールトマスターには、プラズマバーストシステムを搭載してオールト・リボンの解明を託された。プラズマバーストシステムは、エンジンとして推進力を生み出すだけでなく、電力も賄うことが出来るシステムだ。電力不足はコレで十分に補えるはずだった。そして、地球、月、火星、そして木星のISSBでSVLA(超大規模干渉計)を構築し、探査機の電波を受け止めるには十分なはずだった。

しかし、その期待されたオールトマスターは、百五十AUを超えてオールト・リボンを観測する矢先に消息を絶ったのだ。

原因は不明だった。

ただ電力不足が原因だったとは考えられなかったし、有り得なかった。その直前までのシグナルレベルは、針が振りきれほほどだったからだ。それはもちろん、SVLAのおかげなのだ。

ただ、消息を絶つ直前のオールトマスターのデータには、多くのエラーが紛れ込むようになったのは周知の事実だったし、こちらからの指示にも正しい動作を行わなくなったことも真実だった。疑われるのは「機器の故障」であるが、それがどんな原因でどのように起こるのかはまったく予想がつかなかったのだ。

そこで人類は、無謀と揶揄されながらも大胆な英断をしたのだ。それが、深宇宙有人探査船『ランナウェイズ』の建造であった。

建造思想

深宇宙有人探査宇宙船『ランナウエイズ』は、木星のISSBに増設されたスペシャルドックで建造が始まった。

『ランナウエイズ』の設計には、慎重な検討と十分な思慮が払われた。何しろ、無人探査機が音信不通になるほどの宙域に送り出す宇宙船である。第一に安全である。今回の『ランナウエイズ』は有人宇宙船だ。クルーの安全は十分過ぎるほど考慮されなければならない。

今までの無人探査機が故障して消息を絶った原因の一つとして、考えられることは放射線である。放射線とは、アルファ線、ベータ線、ガンマ線、中性子線、そして完全にイオン化した軽元素の核もその一つとして考えられ、実質的に宇宙放射線や銀河宇宙線と呼ばれるものと同質である。

だが、銀河宇宙線「GCR」が地球上の放射線と決定的に違うのは、それぞれが持つエネルギーの違いである。GCRのエネルギーは桁違いに大きいのだ。その違いは、粒子が衝突した時に及ぼす効果に現れる。威力と言い換えても間違いではないだろう。これらの高エネルギー粒子は、いとも簡単に核破砕反応を引き起こす。また、陽子や中性子などの核子が原子核から弾き出されることにより、核分裂や原子核合成で元素が形成されたり、同位体が生成されるのだ。超高エネルギーの状態は、恐らく全ての粒子に当てはまるだろう。それは、地球も透過してしまうニュートリノでさえそうだろう。

だが、我々は超高エネルギー状態の粒子についての研究は進んでいない。なぜなら、太陽系内では太陽風や太陽磁場のために実際のGCRを観測できないからだ。

それでも、現在分かっている放射線に対する防御を『ランナウエイズ』に造り込んだのだった。放射線防護の原則は「遮蔽」「時間」「距離」の三つである。

ところが、三つ目の「距離」は無理な話なのである。超高エネルギーの宇宙線が渦巻いているであろう太陽系の外側へ探査に行くというプロジェクトなのだから。その他の要素で補うしかないのだ。一つ目の『ランナウェイズ』の放射線に対する「遮蔽」は次のように行われた。

七十センチメートルの厚さのアクリル樹脂によって作られた、直径十二メートルの水槽に水を充満させ、直径九メートル、長さ二十メートルの居住エリア・モジュールと、直径は同じく九メートルで長さが十メートルのオペレーション・モジュールをその中にフロートさせる構造になっている。

その外側には、厚さ一メートルの過剰水分型コンクリートによって包み込むように覆われた。このコンクリートの塊は、直径十五メートル、長さ三十八メートルとなり、八階建てのビルディングに相当した。

ハッチの部分には、十センチ厚の鉛をアクリル樹脂で積層した構造とし、この部分から放射線が侵入しないように念入りの設計デザインがなされた。

そして、動力源にはプラズマバーストシステムを、推進装置にはプラズマバーストエンジンを、それぞれ独立に採用した。これは、動力源と推進器を別々にすることによってその冗長性を持たせること、そして独立した推進装置は最大限の加速をもたらしてくれるのだ。

このことは、放射線防護の原則の二番目である「時間」に係わることだ。出来るだけ速い速度で巡航し、船体及び乗務員がGCRに曝される時間を出来るだけ少なくしようという思惑なのである。

その他に、観測機器や分析機器、食料や燃料を装備・艤装すると、全長は百二十五メートル、直径が二十メートルの、人類史上で最大の宇宙船となったのであった。

深宇宙へ

足掛け三年の歳月を掛けて建造された「ランナウェイズ」は、二十六世紀を目前にして深宇宙へ進宙した。

クルーの人数は多岐にわたり、宇宙軍や宇宙局、連邦政府は言うに及ばず、広く民間からの採用も重視された。そこから選ばれたのは、船長と副船長と副官の三名、航行・通信スタッフ四名、探査・分析スタッフ五名、エンジニア三名、医療・生活支援スタッフ三名の十八名であった。

進宙式は、華々しく太陽系全体に放映されて祝賀ムードが高まったが、深宇宙へ出発する時には幾分盛り下がっていて呆気ない出発だった。

太陽系の外側に向けての発進時には、全クルーがその発進巡航シューケンスに携わるために、巡航速度である毎秒二十五キロメートルに達する三日ほどは、船内での行動は制限されていた。

発進から二日目の午後らしい時間に、チーフエンジニアのダイスが船長に進言した。

「船長、現在の船速は二十五・二九。巡航速度に到達しました」
それを受けて船長は、クルー全員に指示を出した。

「巡航態勢に移行する。クルーの制限を解除。速やかに各自の持ち場の点検を開始せよ」

全員がシートベルトを外し、ヘルメットを脱いだ。

「やっと自由になれたぞっ」

クルーたちに安堵の表情が現れて、くつろいだ表情になった。

「簡易宇宙食には辟易したぞ。チューブから食う流動食はもう御免だ」

「三日も座ったままだと身体が痛くて仕方がないわ」
すると、ダイスが答えた。

「そう思つて、大きな加速で一日早く終わらせたんだ。わしゃ腰がダメだからな」

ダイスの言葉は皆を笑わせた。だが、船長が咳払いをするとクルーたちは笑うのを止めた。

「笑いはそこまでだ。我々の仕事はクリティカル・ミッションだということをお忘れなく。人類初の外宇宙への探査、しかも有人での探査だ。必ず成功させねばならん。それほど重大なミッションだが、知つての通り、無人機での探査では何も分かつていない。全く未知の領域への挑戦だ。それだけに単なる『礎』となる可能性もある訳だ。それにも係わらず、クルー諸君は『このミッションに命を掛けてもいい』と自ら志願してくれた者たちばかりだ。諸君の強い意志と能力と努力で、必ずミッションを成功に導いてくれ」

クルーは各々、敬礼したり、うなづいたりと行動は様々だったが、クルー全員が鋭い眼光で船長を見つめていた。

最初の一ヶ月は、各クルーそれぞれが多忙を極めた。航法チームは、進路の確認や航路の決定、太陽系との連絡の確保、エンジニアチームは、プラズマバーストシステム、生命維持装置と放射線防護の保守とメンテナンス、探査チームは、観測機器の点検と分析装置のチェック、生活チームは翌日から、生活のケアや食事の提供が始まっていた。

こうしてランナウェイズでの生活が始まり、程なく二ヶ月が過ぎた頃、ヘリオポーズに達した。船長はクルーをオペレータールームに集めて、クルーたちを鼓舞した。

「本船はヘリオポーズに達した。これから本船の本領と我々の能力を発揮するところとなった」

一息入れた船長は、淡々と命令を下した。

「観測チームは全観測機器をオープンにして観測を開始、同時に分析を行う。それに伴って、観測領域の変更の際には航法チームが支援すること。また、観測機器の故障に関してエンジニアチームは

迅速な手当てをしてくれ。そしてその他のスタッフ、船長以下、副船長や副官も含めてだが、観測を第一に行動してほしい。これは人類史上初の太陽系外部への一歩だ。気を引き締めてミッションに当たってくれ。以上だ」

その後すぐに、クルーたちはまるで打ち合わせたかのように一つの台詞を叫んだ。

「ラジャー、キャプテン！」

そして、クルー達は各自の持ち場へと散って行った。

観測中

ヘリオポーズでの観測は、予測された通りに、いや予測された以上の、もとい予測さえ不可能な程の、未曾有の発見の連続だった。

太陽風や太陽磁場の影響は確実に弱まり、銀河の潮流が怒涛のように押し寄せてきていることが、観測機器に頼らなくても船体の震えやきしみで知覚できるほどだった。

一番最初に観測されたのは、やはり宇宙放射線であるGCRだった。しかも、今まで地球上、いや太陽系内では太陽風の影響で、一切観測することが出来なかった『超高エネルギー宇宙線（UHECR）』を検出したのだ。超高エネルギー宇宙線が持つエネルギーは驚くべきもので、観測機器をいかれさせるには十分な程のものだった。

探査チームは色めき立った。特に探査チームのモリは、興奮を抑え切れない感じで観測機器にかじり付いていた。

「これは凄い発見だ」

「ゾクゾクと震えていますよ」

「早く、そして詳しく分析したくて、身体中がウズウズしてますねえ」

しかし、エンジニアチームは辟易としていた。観測する度に観測装置がオーバーフローして壊れてしまうのだった。チーフエンジニアのダイスが船長に「観測する度に壊れやがる。何とかならないのものか」と訴えたほどだった。

そして、電磁ネットで補足した星間物質にも様々な発見があった。L型しかないと思われていたアミノ酸群にD型が発見されたり、各種元素の同位体に新しい組成が加わったり、地球上、いや太陽系内では見付かっていない構造の分子や、どういうプロセスを経るとこんな構造になるのだらうという、実に不可解で興味深い物質がおりびただしいほど量で発見されたのだった。

「全観測機器をフル稼働させていますが、観測する項目以上のデータが採集されている状況で、それだけで精一杯です。分析している時間は全く無いです」

探査チームは、データの収集だけに集中する方針に転換せざるを得なかった。それ程に化学の世界を塗り替える物質が、ヘリオポーズには目白押しで存在していたのだった。

太陽系の外側、つまり銀河の潮流は『何でも有り』の世界だった。我々の手では作れないモノを意図も簡単に、しかも高エネルギーの状態で存在していたのだ。この凄さ、素晴らしさは観測チームを十分に魅了した。

しかし、この凄さや素晴らしさは、我々にとっては『諸刃の剣』であった。数々の大発見に酔いしれて、その時に起こり始めていた、その後に続く悲劇に、ランナウェイズのクルーは誰も気が付こうとはしなかった、いや気が付けなかったのであった。

悲劇

事態は、意外で、予想外で、予測不可能な方向へと発展していった。

それはほんの些細な、そう、日常的な事柄からだった。生活チームの食料を担当しているチェリーが、水が青白く光つていと言いつ出したのだ。

この現象を観測チームが調査したところ、驚くべき事実が解明された。

「この水の光は『ニュートリノによる発光』である」と。

恐ろしく大量で高エネルギーのニュートリノが『ランナウェイズ』の船体突き抜けていたのだ。

早速、放射線防護用の水槽タンクが調べられた。

「うわぁ！ 青白く輝いていて、眩しくて目が開けられない」

エンジニアのサナートが水槽タンクから戻ってきて、そう報告したのだった。

太陽から百八十AUに達した頃にはこの現象はひどく顕著になり、更にオペレーターームの機器が時々妖しく光り出したのである。

「これは何なのだ？」

船長は物憂げに探査チームのチーフ、チャンドラに尋ねた。

「恐らくは『UHECR』の影響だと思われます」

チャンドラは重苦しい表情で答えた。

「放射線防御が役に立ってないということか？」

船長は再び、チャンドラに尋ねた。だが、チャンドラはもう二度と口を開かなかった。

そして、遂に由々しき事態が発生した。

サナートが、病魔に冒されて倒れたのだった。彼は観測機器を船外で修理したり、船内の放射線防護を点検していたエンジニアだ。

その症状は、放射線障害型の意識障害だった。そして彼の全身の皮膚には、放射線障害特有の潰瘍が出来ていた。

メディカルチーフのユキは、目を伏せて船長に報告した。

「中枢神経の細胞が被曝している状態です。恐らく彼は長くないでしょう」

その後は絶えることなく、放射線障害で倒れる者が続出し、遂にはエンジニアチームの三人と探査チームの三人、航法チームの二人、そして生活チームの一人は、六週間以内に命を落とす結果となった。彼らは余りにも放射線を浴び過ぎたのだった。ある者は白血病で、ある者は下痢と嘔吐を繰り返した拳句に細菌感染で、ある者は全身の表皮から出血し、そしてある者は目が見えなくなつて意識を失い、ある者は小腸の出血で亡くなつていった。

実にクルーの半数である、九名が急性放射線障害で命を落としたのだった。

遂に、船長は勇気ある命令を下した。

「この状況を鑑みて、私は勇気を持つて決断した。志半ばで非常に残念であるが、これより帰還シーケンスへと移行する。残ったクルーで、早速準備を始めてくれ」

エンジニアがいなくなつた『ランナウェイズ』は、船長と副船長、副官がその代わりを務めて、観測機器の収納、機器のロックを行い、航行チームは現時点から木星のISSBに帰還するための航行プログラムの方策を開始した。また、探査チームは観測したデータを分析する工程に移行し、観測データをセーブする作業も同時に開始した。

ところが、更に追い討ちを掛けるような出来事が起こつたのである。

それは『反物質の衝突』であつた。

UHECR同士が衝突すると、原子崩壊や原子融合が起こる。特

に原子崩壊の時には多量で数多くの種類の粒子が放出されるのだが、その時に「反物質」も放出されているようだった。反物質が放出されても通常はすぐに正物質と対消滅を起こしてしまうのだが、連鎖的に衝突が起こって反物質が集合して反物質の塊になる場合がある。この反物質の塊とランナウエイズが衝突してしまうのだった。

対消滅の反応は等量が原則だ。つまり、反物質の塊と同じ質量分のランナウエイズの外装が消滅する。そして消滅するだけでなく対消滅時のエネルギー放出、つまり爆発でランナウエイズの船体は破壊されていくのであった。

「早く、早く帰還を開始するんだ。我々は無駄死にはならない。何とか、何とか……」

それが船長の最後の言葉だった。帰還シーケンスを開始したランナウエイズだったが、残りのクルーたちも瀕死の状態だった。

太陽からの距離がおよそ二百八十六AUの遠心点で折り返したランナウエイズは、少し明るく輝いている深宇宙から最大船速で、太陽を目指して突き進んでいた。

報告書

二十六世紀に入って十年ほど、海王星に建設中のISSBが一部分を稼動してからおよそ半年が過ぎた頃だった。SVLA観測網が不思議な電磁波をキャッチした。

「ランナウエイズ、帰還中。ランナウエイズ、帰還中」

それは、少し前の軍用暗号で送られてきた信号だった。

「それで、発信源は探知出来たのかね？」

海王星のISSB司令官であるゴールが、オペレータに尋ねた。

「はい。ランナウエイズは現在、いて座方向の太陽からおよそ五十四AUの位置で、毎秒四十五・八九キロメートルの速度で太陽に向って進行中です」

「相分かった」

ゴールは、大きくうなずきながら答えた。

「帰ってきたのか。人類は皆、君たちのことを……」

ゴールは大きく溜息をついて、感慨深げに宙を見つめた。

しばらく考え込んでいたゴールは、ランナウエイズを指し示すモニタ画面に視線を上げてから、ゆっくりと命令を下した。

「深宇宙有人探査船『ランナウエイズ』の受入準備に入る。パイロット・シップは準備が出来次第発進、最大船速でランナウエイズに急行せよ」

二週間後、四隻のパイロット・シップは「ランナウエイズ」に最接近していた。

「U-ISSB、こちらPSリーダー。PS搭載のワイドレンジリーダーで補足した。間もなく目視で確認できると思う」

やがて、まるで真っ黒に汚れた濡れ雑巾を絞ったような塊が視界に飛び込んできた。

「これが、宇宙船か？ とてもそうは見えない」

「只の真つ黒な岩石のように見えるぞ」

「座標、速度から言って間違いはない、これが『ランナウエイズ』だ」

「どうしたら、どうなったら、こんな風になるんだ？」

「詮索は後だ。とりあえず、コンタクトだ」

「ランナウエイズ、応答せよ。こちらは地球だ。聞こえるか？」

全ての通信チャンネルと通信回線で呼び掛けを行ったが、まったく反応がなかった。

「乗組員の安否確認を引き続き行いながら、減速作業を開始しよう。それから、U-ISSBに曳航だ」

四隻のパイロット・シップは、真つ黒な濡れ雑巾の塊と速度を合わせて並走し、ボーディングブリッジで真つ黒な濡れ雑巾の塊に船体を固定した。

「四隻とも固定作業完了、強度試験も終了しました」

「減速作業を開始する。最大加速にて毎秒十キロメートルまでブレーキを掛ける。プラズマバーストエンジン逆噴射開始！」

ランナウエイズからきしむ音がボーディングブリッジを伝って聞こえてきた。

減速が終わった四隻のパイロット・シップは、ボーディングブリッジで「ランナウエイズ」を捕捉したままで、海王星ISSBへと曳航していた。

「全くひどい有様だ」

「まず、乗組員の生存は無理だな」

「今だに、呼び掛けているが反応は依然として無しだ」

「この分だと、メデイカルカプセルの中でも生存はあやしいぞ」

パイロット・シップの水先案内人たちは、ランナウエイズを検分した感想を報告し合った。

「この外装のやられ方は異常だ。外装物質が変質している。しかも放射線量がもの凄く高い」

「ボーディングブリッジから回線を接続したいが、放射線がひどく

て近寄れないしな」

「幸い、プラズマバーストエンジンが停止していて良かったよ」

「プラズマバーストシステムも停止しているみたいだし」

「ただ、船が戻ってきただけか」

「いや、戻ってきただけでも凄いぜ」

「それはそうだ、うん」

「ああ、そうだ」

「最初に、ランナウェイズに乗り組んだ十八名の乗組員に対して敬意を表します……」

「まず、ランナウェイズに記録されていたデータはほとんど解析できませんでした。僅か十二パーセントのみの解析結果を開示したいと、このように考えております。えー、……」

このように「ランナウェイズ」が帰還して半年後に行われた調査委員会の報告会は、驚くほど形式的で簡素に進められていった。

外装が放射線で焼かれたこと、データも放射線の影響で解析できなかったことが簡単に述べられただけだった。

そして、報告会は三十分ほどで締めくくられようとしていた。

「……という訳で『ランナウェイズ』に関する報告は以上です。これにて報告会を終わります」

それまで黙って聞いていた聴衆の中に、挙手している者がいた。

それはオブザーバーで参加していた司令官のゴールだった。

ゴールは指名される前にスクツと立って重い口を開いた。

「では、ランナウェイズは何も無かった、無駄だったということか？」

数十ページのペラペラな報告書も、外観とコンピュータのデータだけが調べられ、ロボットで遺体を運び出した程度の調査だけで、船体内部を隈なく調査されていない雰囲気がありありと分かるものだった。

慌てた報告会のチーフスタッフはシドロモドロだった。

「いえ、そういう訳では……。ただデータの損傷が激しくて十二パーセントほどこしか解明できなかったの……」

ゴールは報告会のチーフスタッフを睨んだ。

「船体は調べたのかね？ 全てを調べたという報告書ではないように感じるが？」

報告書を作成したスタッフの数名はコッソリと逃げ出して、既に会場に居なかった。

それを見抜いたゴールは机を拳で叩いた。会場にいた誰もが一瞬、ビクツとなった。そして一際大きな声で、だが恫喝することなく静かな口調でゴールは問いただした。

「いいかね、諸君。この『ランナウェイズ』には十八名が乗り組んでいたんだ。彼らに手向けることも無く、こんな薄っぺらな報告書で『無駄だった』と一笑すべきことかね？ 私は違うと思うのだが」
そう言い残すと、ゴールは会場を出て行った。

二年後に再び『ランナウェイズ』に関する分析報告会が行われた。今回は、部品一つ一つに至るまで分解され、丁寧な調査が行われ、その報告書は、優に一万ページを超えていたという。ランナウェイズは、その存在全てが貴重な資料となった。

外装のほとんどが対消滅の跡で覆われていて、船内の各所にも超高エネルギーの放射線が貫いたこと、その為にデータは破壊され、プラズマバーストシステムとエンジンもオシャカになったこと、遺体に関してもほとんどがミイラ化していたことなど、ランナウェイズを襲った未曾有の悲劇は、想像するに余りあるものがあつた。

しかし、ランナウェイズのクルーが残したものは人類にとって大いなる遺産であつた。そして、人類が初めて太陽系の外側に出た証拠でもあつた。

その分厚い報告書の最後のページである一万二千九百六十四ページには、こう書かれていた。

『宇宙はあらゆる可能性に満ちている。しかし、我々は何も知らな

かった。数字で言えば、自然数しか知らなかったとの同じだった。
虚数、有理数、小数はおろか、マイナスの数さえ知らなかったのだ。
それが【太陽系の外側】であつた』と。

報告書（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

宇宙のことが好きで、日頃からNASAやJAXA、その他の宇宙関連のサイトを調べたりするのですが、太陽系の外側の情報はほとんど分らず仕舞いでした。

辛うじて僕が分かったらしいことは、IBEXの探査でヘリオポイズにおけるEnergetic Neutral Atom（高エネルギー中性子のことらしいツス）の分布がリボン（帯状）になっている、それが銀河の磁力線の方角に対して垂直である、ってことくらいかなあ。

それで「それじゃあ、何でも有りだな」ってことで、空想（妄想ともデタラメともいう）してみた、というのが発端です。

ラストシーンは『コスモス・エンド』の「銀のたてがみ」をパクリ気味ですが、とにかく宇宙船を飛ばして帰還させたかったんです、あの『はやぶさ』のように。ある意味で『はやぶさ』に対するオマージュだったりします。

ハードSF！とか、スペオペ！とかと叫んでいただければ、とても嬉しかったりするのですが、どんなもんでしょうか……。白状すると「N元帥」にちよっぴり傾倒しています、はい。

内心では、空想の内容や思想よりも、話の見せ方や構成の仕方、小説の書き方がずっと問題かもしれない、と思っっていたりします。

感想など、たくさん聞かせていただければ幸いです。よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5368n/>

太陽系の外側

2010年10月8日13時48分発行